慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カイザーリングの日本紀行 : 西洋認識論の枠組みに映しだされた「大和的なるもの」
Sub Title	Hermann von Keyserlings „Reisetagebuch eines Philosophen" : baltische Reminiszenzen auf einer „Pilgerreise" durch „Yamamto"
Author	Knaup, Hans-Joachim
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.31 (2000. 9) ,p.50- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20000930-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カイザーリングの日本紀行

― 西洋認識論の枠組みに映しだされた「大和的なるもの」―

クナウプ　ハンス・ヨアヒム

1. 旅の方法論 ― 認識と旅

ヘルマン・カイザーリング（1880–1946）は 1911 年に世界周遊に旅立ち，翌年の 12 年 5 月から 6 月中旬まで日本に滞在した。この旅はセイロン，インド，中国，日本，アメリカの順番で北半球周遊を目指したものであった。カイザーリングはこの旅の記録として『或る哲学者の旅日記（Das Reisetagebuch eines Philosophen)』（1918 年）という二巻本を著わしており，全体の 9 章のなかの第 6 章目に日本に関する記述をとどめている。第 6 章の日本に関する記述はさらに次の項目に分けられている ―

1. 大和を巡って（Durch Yamato）
2. 高野山の寺院において（Im Kloster von Koya San）
3. 奈良（Nara）
4. 京都（Kyoto）
5. 伊勢（Ise）
6. 宮ノ下（Myanoshita）
7. 日光（Nikko）
8. 東京（Tokyo）

まず第1項で日本を「大和（Yamato)」と記載している点にすでに日本に関するカイザーリングのある種のスタンスが認められるであろう。カイザーリングの訪れた1912年は明治から大正に時代が変わる時期であり，日清・日露の二つの戦争に勝利した日本は本格的な近代化の道を突き進んでいた。こうした状況の日本においてあえて「大和」を強調している意図は，カイザーリングの『或る哲学者の旅日記』の冒頭の次の文に表れている —

「私の日本滞在は大和の地を徒歩で巡るようなものである。大和，それはこの国の最古にして最も神聖な記憶と深く結びついている日本の辺境のこと。そうした仏教の聖地に詣でる巡礼の旅の時を過ごそうと言うのである。」[1)]

ダルムシュタット・ヘッセン州立図書館に保存されているヘルマン・カイザーリング遺稿集のオリジナル資料を見ると，1912年5月10日神戸，同年5月11日奈良から始まって5月27日宮ノ下，6月1日から3日にかけては日光というように，特に「大和」が強調されているわけではない。但し地名として具体的に「Yoshino」を記載した部分については，後から「~~Yoshino~~」という形で消して「Yamato」としている痕跡を認めることができる。[2)] オリジナル資料は，手書きで書かれたおよそ600枚の用紙から成り，それらは10冊の冊子にまとめられている。600枚の用紙については裏表の両面が使われており，総ページ数にして1000ページを超える大部なものとなっている。こうしたオリジナル資料を丹念に検証していくと先に述べたような言葉の微妙な修正に出会うことになる。

「吉野」を消してその上に「大和」を記載したカイザーリングの意図はさ

1) Hermann Keyserling: Das Reisetagebuch eines Philosophen, Zweiter Band, Darmstadt 1922, S. 577.

2) Hermann-Keyserling-Nachlaß, Depositum in der Hess. Landes- und Hochschulbibliothek Darmstadt: Reisetagebuch.

まざまに推測できるであろう。例えばドイツ人にとって，„Yoshino“ という鋭い音感を含む発音よりも „Yamato“ と口にする方が心地よい感じがすることも，その理由の一つであったかもしれない。しかしそれ以上に「大和」という響きから連想される普遍的なものにカイザーリングはこだわったのではないだろうか。

「大和」は日本の「辺境（Provinz)」とカイザーリングは述べているが，しかしそれは人里離れた奥地の意味ではなく，近代化の流れのなかでそうした影響を受けずに「大和」的なものを残している場の意味である。それは「この国の最古にして最も神聖な記憶と深く結びついている」場である。カイザーリングはこうした「大和」への旅を「巡礼の旅」と結び付けている。ヨーロッパでは，「徒歩の旅」(Fußwanderung あるいは Fußreise）はもともと巡礼者の旅や徒弟の旅を意味しており，こうしたイメージの連鎖が上記のカイザーリングの「私の日本滞在は大和の地を徒歩で巡るようなものである」という表現を生み出しているのではないだろうか。[3)]

こうした「大和」を感得するためにカイザーリングは日本の風景，宗教・芸術，人々の生活，寺や神社など多様な現象に関心を払っていく。こうした観察に際してのカイザーリングの基本的な認識態度は『時を旅する（Reise durch die Zeit)』という著作のなかの次の一節に集約的に表現されている—

「細かく分類して厳密さを追求するところに理想を置いたり，あるいは

---

3) カイザーリング研究者のガネシャンも，カイザーリングの旅は「好奇心」や「研究心」を契機に始まったものではないことを指摘している——「カイザーリング自身の言葉によれば，自分を広大な世界へと駆り立てたものは，好奇心や研究心ではなく，多くの人々を修道院へと向かわせる衝動そのものであった。つまりそれは自己実現への限りない憧憬と言えるものである。……カイザーリングは自分を「終わりなき巡礼者」と呼んでいる。カイザーリングの旅記述は百科全書的な旅行記の性格を帯びたものではない。」(Vridagiri Ganeshan: Das Indienbild deutscher Dichter um 1900. Bonn 1975, S. 244.)

そうした厳密さを命令されたりすることほど，私の生まれながらの気質から程遠く，疎遠なものはなかった。私の内面の生や体験（Erleben）のすべての基調にあるものは，珍しいことかもしれないが直感(Intuition)と言えるようなものであり，この直感とはもともと全体性（Ganzheit）に通じているものである。つまり理解するのにそれぞれの感覚が別々に捉えたり，思考によって分解せざるを得ないもの，そうしたもののもともとの全体の連関に直感は通じている。それゆえ，どのような思考の水準にあっても，自然な「知覚（Gewahrwerden)」の働きだけで十分であり，こうした「知覚」は真に直感が作動していれば現実の根源にまで迫り，通常の説明能力よりもずっと深い理解を可能にするのである。私の場合はさらに自分の特別な資質の故に，こうした「知覚」は事実に関るのではなく，感覚のイメージ（Sinn-Bild）によるのである。こうしたイメージの重要性は，同じ資質を持つ人にはすぐに明らかになる。科学的な精密性はこのような感覚のイメージに勝ることはできない。」[4)]

カイザーリングはまず近代の体系的な精密な理解のシステムにたいする批判を展開している。「細かく分類して厳密さを追求する（diffenrenzierte Abgrenzung)」認識の立場は，「内面の生や体験のすべての基調にあるもの」を理解することにはならない。カイザーリングが強調するのは「直感」の機能であり，「直感」は分離する「思考」の働きなどによっても決して「消えることのない連関（der unauflösliche Zusammenhang)」に通じているのである。さらにカイザーリングがここで強調していることは，現象の「知覚」に関わる問題である。つまりここで言われている「知覚」は通常のように事実としての現象に基づくのではなく，「直感」とともに作動することで「現実の根源にまで迫り，通常の説明能力よりもずっと深い理解を可能にする」能力である。こうした「知覚」は現象の事実ではなく，現象の本質

4)　Hermann Keyserling: Reise durch die Zeit. I. Vaduz 1948, S. 191.

に連なるある種の「イメージ」によって喚起されると言われている。

「内面の生」あるいは「体験」は，カイザーリングによればこうした「直感（Intuition)」,「知覚（Gewahrwerden)」そして「イメージ（Sinn-Bild)」によって構成され，持続的な「消えることのない連関（Zusammenhang)」に関わっているのである。こうした「連関」という表現はヴィルヘルム・ディルタイの「生の連関（Lebenszusammenhang)」を想起させるであろう。ディルタイによれば「体験」は「全体」に関係しており，「全体」とは「さまざまな瞬間の総和や総体」ではなく，「すべての部分を結びつけている諸関係によって構成された」「持続的連関」のことである。こうした「持続的連関」に関わる「体験」の構成について，ディルタイも「感情（Gefühl)」「知覚（Wahrnehmung)」さらに「イメージ（Vorstellung)」に言及している。カイザーリングは1906年にベルリン大学哲学科で教授資格論文を提出しようとしているが，それはディルタイの推薦によるものであり，カイザーリングのアカデミックなキャリアにディルタイがなんらかの形で関わっていたことは事実である。この教授請求は哲学科の他の教授の反対にあって受理されなかったが，[5]「全体性（Ganzheit)」との関わりで論述さ

5）ガーリングスの研究は，カイザーリングの教授請求が受理されなかった経緯と，それに対するカイザーリングの反応について次のような事実を伝えている—「1906年の復活祭から1908年までの間，カイザーリングは途中何度か旅に出かけてはいるもののベルリンに滞在していた。ベルリン滞在の目的は哲学専攻の学者として生きるためのキャリアを始める点にあった。しかしカイザーリングは大学で自然科学系を学んでおり，文科系ではなかったことが，こうした彼の意図を実現する上で妨げとなった。カイザーリングの最初の哲学的著作『世界の構造』は，ベルリン大学教授で生の哲学者として知られていたヴィルヘルム・ディルタイ（1833-1911）のような有力者の推薦があったにも拘わらず，教授論文として受理されなかった。カイザーリングによれば，「新カント派のリール教授（1844-1924）は大変慇懃に私にたいして，私の著作があまりに芸術性に富んでいて，学問的とはやや言いがたい」という結論を伝えたのである。しかしこうした結論によってカイザーリングが特に傷つくことはなかった。つまりカイザーリングは「まったくもっともなことで，この否定的な結論に私とし

れているカイザーリングの「体験」の概念にディルタイの「生の哲学」の影響の痕跡を見つけることはそれほど難しいことではない。

しかしカイザーリングの「体験」に込められている意味を当時の流行哲学であったディルタイの「生の哲学」にのみ還元してしまうのは，認識論に傾きすぎた解釈と言わざるを得ない。近代化の道を歩む日本を見て，そこに「大和」を感得しようとするカイザーリングの体験の「意味連関」を探るには，カイザーリングの生に込められた「歴史性」をみておかねばならない。

カイザーリングの生の「歴史性」を再現することは別の論稿を起こさねばならない大きなテーマであるが，ここではカイザーリングがヴェストファーレン出身の十字軍に従軍した末裔であり，ドイツ・バルト貴族の初期の一族であった点を特に指摘しておきたい。カイザーリングは父親の管理のもと，徹底した古典語教育つまりギリシャ語，ラテン語教育を受けており，さらにドイツ語はもとよりフランス語，ロシア語も完全に修得していたと言われている。こうした非常に高度な教育とドイツ・バルト貴族のなかでも誇りある伝統の一族であるという意識が，カイザーリングの言う「体験」という概念に認識論を超える個人的な色調を与えているように思われる。

カイザーリング研究者のウーテ・ガーリングスは次のように述べている—

「カイザーリングは本格的な世界旅行について具体的な計画を練っていた。しかもその旅行は哲人あるいは，形而上学を極める者としての旅であった。それは気晴らしでもなく研究が動機となったものでもなかった。自然を満喫したり教養を高めることが目的ではなかった。カイザーリングを旅行へと駆り立てたものは多様な面を複眼的な視点で見たいという思いであった。文化的教養を豊かにすることや観光目的などはカイ

ては原則的に満足しております。むしろ私はお陰で自由のまま生きられるわけで，……自分のすべての力を生産的執筆に集中することができる」と述べているのである」。(Ute Gahlings: Hermann Graf Keyserling. Darmstadt 1996, S. 47.)

ザーリングの否定するものであった。カイザーリングはギリシャ神話に登場し変幻自在に変身するプロテウスに自分を準えていたように思われる。プロテウスはどのような姿・形になっていようとも，火に変身している場合でさえも，自己同一性を維持できて，且つ変容できるのである。カイザーリングは自己実現の域に到達しようとしているが，それは永遠に変容する者として目指しているのである。つまり旅という方法でカイザーリングが達成しようとしているものは，自分の本質存在を深化しその能力を高度なものに高め，具体的な現実を超えるようなメタな実在へと連なる道筋を極めようとするのである。」[6)]

ガーリングスの指摘で興味深いのは，カイザーリングの旅の方法論をギリシャ神話のプロテウスを引き合いに出しながら説明している個所である。カイザーリングが1911年に世界周遊の旅に出立したことは初めに触れたが，この旅は文字通り世界を一周して巡るものであった。当時は商船が急速に発達しておよそ60日間で世界一周が可能となった時代であった。カイザーリングは1年間をかけて比較的ゆっくりとしたペースで船旅を続けている。ガーリングスによれば，滞在地ごとにいわばプロテウスのように自在に変容して，その土地の特性や風土に入っていくわけであるが，しかしその究極の目的は，変容しても変わらない「自分の本質存在」への常なる旅であった。

ところで「具体的な現実を超えるようなメタな実在へと連なる道筋を極めようとする」カイザーリングの旅の志向性の中には，カイザーリングのバルト貴族としての出生の問題がこめられているように思える。もちろんこのテーマに入ることは，すでに述べたように，ドイツ・バルト貴族の歴史に分け入らねばならず，本論の枠を超えるものであるが，しかしここで1980年刊行の「バルト騎士団研究会年報」に掲載された次の報告を紹介することは，本論の意図するところからは大きくはずれるものではないであろう—

6) Ute Gahlings: a. a. O., S. 67

「今からおよそ100年前に生を受けたバルト人たちは，人生の壮年期に，ロシア革命を体験し，故国の昔ながらの秩序が崩壊する様を目の当たりにしたのである。この歴史的転換がこうした世代のバルト人にとっていかなる意味を持っていたのか，今となっては完全に再構成することはもはや不可能であろう。1880年頃に生まれた世代の人々の多くは，革命前の「旧体制」の政治的・社会的構造のなかで成長し，教育を受け，既定の人生行路を歩むことになっていたのであるが，しかし周辺の環境が変わり，財産や職を失うことによって自分たちの確たる基盤をもはや持ち得なくなってしまったのである。到来する新しい時代が求める様々な要請を無視して生きようとするには，この世代の人々はまだ若すぎたのである。一人一人を見れば，測りがたい偶然の出来事に翻弄される個々の運命を生きざるを得なかったのである。この世代のバルト人の少なからぬ人々は，内面において翻弄されるばかりでなく，具体的な生活の面でも世界の様々な地域をさすらう放浪者となったのであり，そうしたさすらい人は根無し草で，故郷喪失の気持を抱き，ただ自分自身だけが唯一の拠り所という状況に置かれていたのである。」[7)]

カイザーリングはリヴォニア地方のエストニア国境に接する領有地ケンノに1880年7月20日に生まれており，まさにそうした「根無し草で，故郷喪失の気持を抱き，ただ自分自身だけが唯一の拠り所という状況に置かれていた」没落バルト貴族の「さすらい人」の世代を具現する人物であった。そうしたカイザーリングにとって，旅はその土地の特性や風土に入りそれを記述することが目的ではなく，滞在地ごとにいわばプロテウスのように自在に変容しながらも，究極の目的は，変容しても変わらない「自分の本質存在」を常に探求し確認する点にあった。

---

7) Henning von Wistinghausen: Von Estland nach Japan. Nachrichtenblatt der Baltischen Ritterschaften, Heft 4, 22. Jahrgang, Nr. 88. München, Dezember 1980, S. 73f.

カイザーリングは『或る哲学者の旅日記』の序文のなかで，この旅日記が「一つの文学作品」として読まれることを求めている—

「一冊の小説を読むようにこの旅行記に接してもらいたく読者諸氏にお願いしたい。旅日記の大半は世界周航の旅の途上で私の関心を引いた個々の事象ごとに独立した一冊の別の本として出版できるほどの客観的な考察や描写も含んでいるのであるが，しかしこの旅日記は全体としては，内面から創造され，内的な連関性を有する一つの文学作品なのである。こうした文学作品としてこの日記を受けとめてくれる人，そうした読者のみが私の記述の本来の意味合いを理解できるであろう。」[8)]

カイザーリングは『或る哲学者の旅日記』のなかで「理論化された，あるいはその可能性のある世界観」を提示するのではなく，「橋をかけることなどできそうもないほどに対立・矛盾するものを溶かして融合させ，新しい，豊穣なイメージが生まれてくる」意識状態に実際に到達する道筋を暗示するような記述を目指しているのである。

2. 二律背反の超克 — 現象から本質存在へ

カイザーリングは日本の様々な現象を記述するにあたって，ヨーロッパ近代が生み出した概念装置を駆使しているが，しかしここで重要な点は，そうした概念装置の枠組みに日本の現象を無理やり入れ込むのではなく，現象の記述を推し進めるなかで，二律背反的に機能している概念が融合する地点にまで達しているところにある。本論ではこうした二律背反の概念装置として，カイザーリングの記述の中から次のものを摘出して論じることにする—

8) Hermann Keyserling: Das Reisetagebuch eines Philosophen, Erster Band, Darmstadt 1922, S. XXX.

・「自然」と「人為」(Natur und Künstlichkeit)
・「精神」と「物質」(Spirituelles und Materialistisches)
・「思考」と「感覚」(Denken und Empfindung)
・「形式」と「内容」(Form und Inhalt)
・「創造」と「模倣」(Schöpfen und Imitieren)

2-1. 「自然」と「人為」

カイザーリングはまず「生け花」という現象のなかに，本来対立関係にある「自然」と「人為」が融合している稀有な事例を認めている—

> 「アジアの風景画には風景の生命と言うべきものが真に内在している。日本人は，自然を自然のままに生かしながらそこに人為を加えることに成功しているのであり，しかもそれを一種の遊戯として行っている。日本の生け花の比類なき完成は，‘花を結んで束ねる’人為の技のなかに花の本来の精が生きている点にこそある。専門家が手を入れた森林は日本の場合，ドイツに比べて不快なものではない。なぜなら日本では，木々に自分の考えを押し付けたりせずに，樹木そのものにとって最も好ましい方向で手助けするのみだからである。」[9)]

ヨーロッパは「自然」と「人為」の関係で見ると，「自然」にたいして人間の側の意図や志向を「押し付ける」か，あるいは「自然」を「自然」のままに放置するかである。例えばフランス式庭園に見られる思想は，自然を幾何学的図象に合わせて加工し「人為」の技を見せる点に主眼が置かれているのにたいして，イギリス式庭園の思想は「人為」の関与を感じさせないように「自然」を見せようとするところに中心がある。カイザーリングはヨー

9) Hermann Keyserling: Das Reisetagebuch eines Philosophen, Zweiter Band, Darmstadt 1922, S. 578.

ロッパの思想の根本概念の一つである「自然」と「人為」という対概念を用いて，日本の生け花の技を分析する—「日本の生け花の比類なき完成は，‘花を結んで束ねる’人為の技のなかに花の本来の精が生きている点にこそある」。この表現のなかには，ヨーロッパでは通常対立的に用いられる「自然」と「人為」が相互を排除することなく溶け合って「生け花の比類なき完成」に寄与している様相が描かれている。しかも「日本人は，自然を自然のままに生かしながらそこに人為を加えることに成功しているのであり，しかもそれを一種の遊戯として行っている」とも述べられており，「自然」と「人為」のあいだの関係の構築が無目的で無意識的な「遊戯」のなかで行われている様が驚きをもって報告されているのである。

2-2. 「精神」と「物質」

奈良でカイザーリングはある宝物殿を訪れており，そこに展示されている仏像などの美術品を見て，「高野を訪れたあのとき以来自分の脳裡から離れなかった問題がようやく明らかになった」と述べている。その問題とは，仏教の祖であるインドの賢者たちが表現しようとして成し得なかったことを，日本人が「それとは知らないうちに」さまざまな仏教美術のなかで完成させてしまっているという現象である。それは，いわゆる「全知のインド人」が，仏教の精神と世界をすべて把握しているはずなのに，なぜそれを具象的に表現できなかったのかという問題とも言いかえることができる。カイザーリングはこの問題領域の枠組みのなかでドイツ人の文化にも言及しており，「ヨーロッパ精神を伝える具体的形象」つまり宗教上の美術品などであるが，「それらのうちでこれまでに最も長く継承されているものが，より深い精神を有するゲルマン人ではなく，ローマン系の人々に由来している」という事実に注意を喚起している。

カイザーリングは，こうした現象から次のようなテーゼ，つまり「不可視の精神界にあるものを表現し，優れた可視的なものに結晶させるのは，精神主義の民族ではなく，物にたいする特別な感覚を有する物質主義の民族に

よってよく成される」ものであるというテーゼを導きだしている。但しカイザーリングは「物質主義」という概念について，「もちろん通常よりもはるかに広い意味」で用いており，「精神を現象化させる」あらゆる活動にたいしてこの概念を適用しようとしている—

「物質を意のままに扱うには，物質にたいして完全に勝っている器官，つまり発達した感官が必要である。精神それ自体ではそれを為し得ない。同じ一人の人間のなかで精神と感覚器官が等しく完全に備わっていることは有り得ず，むしろ両者の装置のあいだには二律背反の関係があるので，現象界においてはものごとを物質主義的に捉える人がおおかた成功を収めることになる。ところで精神界にあるものの表出はいかなる場合にも現象の領域に属するのである。従って，最も優れた表現を見いだすのは，精神のみで生きている人ではなく，精神を物質化する術を最もよく心得ている人である。こうした人間こそ物質主義者と言える人である。この人物は精神界に属するものそれ自体を決して自分では認識しないが，しかしそれが見えてくると，それをもっともよく捕捉するのである。精神界の真実をもっとも完全な形で把握した形象が聖人や哲学者からではなく，まさに詩人から生まれてくる理由はここにこそ求められるのである。」[10)]

カイザーリングは奈良の宝物殿のなかの仏教美術を見て，パイオニアとしてのインドや中国の賢者たちによって実現は目指されたものの，しかし「彼らの能力をはるかに越える」コンセプトが，彼らの「弟子」である日本人の手によって「最も見事な完成の域に到達している」という状況を認識している。こうした体験を通じてカイザーリングは，精神と物質の二律背反が高度なレベルで融合し，「浄化された」状況が具体的な姿をとって結晶化しえるものであるという驚くべき領域の存在を認識するのである。

---

10)　Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 607f.

2-3. 「思考」と「感覚」

カイザーリングはインドや中国における宗教心のありようについて鋭い観察を残しているが，そうした体験に基づいて日本人の宗教心の特殊性に言及している。カイザーリングによれば，「インドに見られる信仰の深さ」は日本人には見られず，「ベナーレスやラーメシュヴァラムの巡礼者の表情」に現れている「内面体験の濃密さ」のようなものを「日本のどこでも感じることはなかった」とのことである。さらに「日本の僧侶と大乗仏教についてよく話し合ったが，そうした対話は自分にとって教えとはならなかった」とも述べている。

しかし「日本の仏教」は，カイザーリングには「最初の瞬間的な印象で思うよりもはるかに生命力に富んだ意味を有している」ように思えるのである—

> 「日本人はインドから見れば信仰があるとは言えないし，キリスト教からみてもそうである。さらに日本人には深い認識や想像力が欠けているのである。（……）しかし日本人にとって思考は何ら本質ではなく，日本人に独自のもの，最も深いものは感覚のなかに現れるのである。私が言いたいのは日本人の感覚のことであり，感情とか心とか心情のことではない。つまり日本人の心性の表層が内部や外部の世界の様々な印象にどのように反応するかが問題であり，こうした心性の深層は問題とならないのである。日本人の内面の生は，子供や若い女性にこそ見られるような感覚の作りなす王国のなかで営まれている。こうした感覚のなかにこそ日本人の信仰も現れている。子どもの信仰は深いものではないが，神に直接通じている。こうした信仰のあり方はあるゆるもののなかで最も好ましいものである。」[11)]

---

11) Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 597f.

カイザーリングによれば，日本人は「知覚できる世界との交際を通して知覚できない抽象の内面世界に至る」のであり，「信仰心を具現化するところに優れた才能を有している」のである。つまり，すでに2-2の項目で述べたことに関連するのであるが，「日本人の信仰」は「感覚や観想の世界のなかで様々な現実の姿を生み出し，それらは人類の最も優れた財産の一つ」なのである—

「さて私は宗教芸術に深く傾倒した。仏教は宗教芸術の分野で最高のものを地上にもたらしたように思える。仏教の傑出した記念碑の多くは日本の奈良と京都の周辺に見ることができる。光の理念を具現している阿弥陀が自らこの世の暗闇を浄化し，太陽のように山々の峰に立ち上がる様を描いた絵画，それに心の平安がおそらく究極の形となって現れ，瞑想し至福の恵みを施す仏像の群，そうした仏教美術の宝庫に比べるとキリスト教徒の想像力が生み出したどれほど優れた芸術も精神に欠けるところがあるように思えるのである。ヨーロッパ初期中世の素朴な芸術家は深みのある感覚という点では仏教の芸術家に劣ってはいなかった。しかしヨーッロパの芸術家の感情は，思考や悟性の壁にあたって波のように砕けてしまったのである。こうした芸術家は，信仰を言葉で把捉できるように具体的な形姿（歴史やある種の客観的な事実となるように）を与えるか，あるいは解釈できるような寓話にしたてあげてきた。しかしいずれも信仰の直接性を不可能なものにしてきたのである。」[12)]

カイザーリングは，「思考」を介在させたヨーロッパの信仰のあり方にたいして，日本人の信仰のありように「信仰心に連なる感覚」の存在，あるいは「信仰の直接性」の可能性を認知しているのである。カイザーリングによれば，「日いづるの国の信仰心溢れる抒情詩ほど繊細なものはない，阿弥陀

12）Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 603f.

と観音に具現されている愛の構想ほど甘美なものはない，日本の仏教徒が浄土の世界について抱いているイメージほど柔和で心和むものもない」のである。こうした信仰の優れた具象化は「まさに感覚の王国のなかで行われている」のであり，カイザーリングは「感覚の領域では日本人はおそらく他の人々に比べて最も高いところに位置している」とも述べ，信仰という不可視の世界を可視的な世界で見事に具現する通常の感覚を越えた感覚，あるいは今日であれば「メタ感覚」としか表現のしようのない能力の存在に驚きを隠していない。

2-4. 形式と内容

カイザーリングは日本を旅しているあいだに，日本の知識階層に「仏教よりもキリスト教に心を動かし，そのためキリスト教を過大に評価している」人々が少なからず存在していることに気づいている。しかし同時に，逆の現象であるが，「最近」のヨーロッパに「東洋の宗教に関心を寄せている」人々が増えつつある点にも注意を喚起している。カイザーリングは，双方に見られるこうした現象を単に「過ち」として表面的に批判するのではなく，「形式」と「内容」というヨーロッパの知的世界を構成している重要な概念を駆使しながら，「異質なるものにたいして関心を抱くこと」の可能性について独自の解釈を生み出していく。

カイザーリングは「東と西」の双方で自分たちの信仰とは違う別の形態の信仰にたいする関心が高まっていることについて，その現象の背後に存在するものを考察するにあたって，日本のある「文学部の教授」との対話のなかで，その教授が述べた言葉が大きなヒントを与えてくれたと回想している—

「昨日，つまり日本の地から離れる2日前のことであるが，私は文学部の教授と学生のためにインドのヨガ哲学について自分の体験に基づいて講演し，その際にヨガの技法は実際に体験されることによってその生

命力に触れられる点を話題にした。こうした問題提起に聴衆は違和感を持ったようである。というのも，古人（いにしえびと）の知恵を外側から文献批判的方法ばかりではなく，内面から迫るべく研究する可能性の存在というものに日本の聴衆はこれまで気づいていなかったからである。しかし聴衆のなかにいた一人の紳士が私に述べたことは，きわめて傾聴に値するものであった。つまりこの教授は，日本人は仏教の根底にある基本的な想念にあまりにも親しみ過ぎているので，それとは知らずに文書となった教えを読み飛ばしてしまう，と指摘したのである。」[13]

カイザーリングはこの「親しみ過ぎ」という現象，つまり「自明性」という点に問題の所在を見出している。つまり，「馴染み深いものにたいしていつか必ず起きること」として，カイザーリングは「飽き」あるいは「惰性」を挙げ，信仰の「奥深さにもはや敬意を払えなくなってくる」状況をキリスト教世界にも認めている。こうした「飽き」，「惰性」から脱し，信仰に「生命力」を回復させるには，「慣れ親しんでいないもの」がもたらす「刺激」が必要である—

「私たちにとって刺激となるのは，慣れ親しんでいないものだけである。しかし新たなものが実はこれまで慣れ親しんできたものと同じような価値や内容を含む点が明らかになってくれば，私たちの心の振動はおのずとより生命力に溢れたものとなる。慣れ親しんでいないものを解釈するのにこれまでの通常の観念の枠組みを用いることはしばしば行われることであるし，そうしたことは即座に実行に移されるのであるが，しかしそうした場合でも，私たちの感動は消えることはなかった。」[14]

カイザーリングによれば，信仰において最も重要なことは単に理論だけで

13）Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 684.
14）Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 684.

はなく，実際の体験，聖なるものとの交わりの実践にある。カイザーリングは，こうした実践の局面のみが最も「重要なこと」であると述べている—

「従って，これまで知られていなかった新しい形式が伝来の形式よりもうまく適切に機能するのであれば，この新しい形式を取り込むことは当然なことと言わざるを得ない。しかしこのように取り込んでも，それは一種の回り道なのであり最終的には伝来のものに戻っていくことになる。今の西洋ではもう明らかになっているが，インドにたいする熱狂的な感動は結局キリスト教に益をもたらすのである。人間は自分のあり方に飽きることなく潑剌としてそのスタイルを維持するには（過大評価になる恐れがないとは言えないが），常に異質なるものを必要としている。こうした相互作用こそが，巨視的に見れば，調和の源となっているのである。」[15)]

信仰の実践のレベルにおいては，他の信仰の「新しい形式」を取り込んでも，既存の信仰の内容に懐疑をもたらすことはなく，むしろ「一種の回り道」をしながらも「最終的には伝来のものに戻って」いき，しかもこの「新しい形式」の「刺激」は「内容」を再確認させ，「飽きることなく潑剌として」自分の信仰のスタイルを維持するのに効果的に機能するのである。カイザーリングは，「形式」の変化が簡単に「内容」の変更をもたらすものではないと指摘している—

「多様な形式・形相（エンテレケイア）それ自体は，永遠に異なったものであり続けるのである。東と西のそれぞれの根幹をなしているものは交換し合えるものではないし，相手のものを導入できるわけではない。私たちが東洋の知に同化しようとしても，それはそうした知の根元にあ

15） Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 684f.

る魂を自分のものにしたのではなく，私たちは新しい独自の‘器官’を生み出しているのであり，同じことは東洋にも必要に応じて当てはまることである。」[16)]

つまり，「異質なるもの」あるいは「新しい形式」との接触は，精神に「若返り」のチャンスを与え，「新しい実りをもたらす精力を回復する」機会ともなる。カイザーリングによれば，「異質なるものを取り込むことは，自己実現のための最短距離でもある」—

「仏教徒もキリスト教徒も，歴史的にさまざまな形態を経てきたが，まだ最終のファイナルステージに達しているわけではない。これまで存在しなかったものが生まれようとしているのであり，あたかも魂が現世に戻って来ようとしているかのように，自分にふさわしい親を求めてもがいているのである。」[17)]

信仰の世界では，「形式」が変わることは恐れられている。しかしこれは一般的現象と思われるが，カイザーリングは信仰の「新しい形式」を恐れるどころか，むしろそれを「取り込む」ことによって，既存の信仰の内容が再確認され，そこに新しい息吹が吹き込まれると考えていた。他の信仰にたいするこうしたスタンスは，「形式」と「内容」の無矛盾を建前とする宗教のありようとは対極を成すものだと言えるであろう。「形式」と「内容」を固定的に見るのではなく，精神の運動性においてとらえようとするカイザーリングの立場は，ヨーロッパのキリスト教世界では必ずしも歓迎されなかったであろう。実際，インド人学者ヴリダギリ・ガネシャンの研究によれば，例えばライプツィヒのキリスト教伝道協会会長アルブレヒト・エプケの「カイ

16）Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 687.
17）Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 687.

ザーリングは宗教について神学の学的伝統を踏まえていない」という否定的言説が記録されている。また1921年に『カイザーリング伯爵，或る哲学者の旅日記とキリスト教』を著したヨハネス・ヴィッテは，「カイザーリングは異質なる宗教にたいして過剰な親近感を抱いており，それぞれの宗教を最高のものと賛え」，結果としてカイザーリングの記述がキリスト教にたいする批判的言説を内包し，「世界に展開するさまざまな宗教に親しみのない読者」に「違和感」を与え，「矛盾」を含んだテキストと見られる危険性に触れている。[18] しかしいずれにしても，「形式」と「内容」というヨーロッパの知的伝統の生み出した二律背反的概念装置をもって，信仰や聖なるものとの交流という局面に見られる多様な形態を描こうとするカイザーリングの試みは，文化人類学や民俗学がまだ十分に学的領域として確立していなかった時代において，主観性の強い記述である点は批判の対象となるであろうが，多様性に視線を向け，自らの知の枠組みのなかで理解に努めた点は相応の評価を得てよいのではないだろうか。

2-5. 創造と模倣

カイザーリングは中国滞在を経て日本を訪れているが，船で瀬戸内海に入ってきたときの印象を，「多くの島々が展開するギリシャの海」に託しながら説明している。幼い時からギリシャ語・ギリシャ神話に親しんできたカイザーリングにとって，ギリシャはバルトの豊かな風景を見ながら想像するヴァーチャルな理想の地であった。[19] カイザーリングは，そうした理想の地

---

18) Vridagiri Ganeshan: a. a. O., S. 278f.

19) カイザーリングはすでに1907年冬にギリシャを訪ねていた。1908年12月15日と28日の二回にわたってレヴァール市でバルトの同胞達を前に「個人と時代精神」という講演を行っている。この講演は次のような言葉で始まっている—「私は昨年の冬をギリシャで過ごしました。……よそ者もいないし，地元の人もほとんど姿を現さないような時期でした。独特な雰囲気を壊すものは何も存在していませんでした。現在もごく最近起きた過去のことも意識から遠のいて行き，私は古代の醸し出す気配に取り巻かれ，あたりはあの偉大な不死の聖霊達

に吹く風と同じような空気の流れを瀬戸内海に感じ，長い航海の後，「まったく新しい世界」にはいる冒険家のような気持ちになったと回想している。

カイザーリングは多くの書物を通して，日本文化が中国の強い影響下に生まれたことを熟知していた。しかし瀬戸内海は「新しい世界」，つまり「中国の世界とはあたかも深い溝によって切断されたまったく異なった世界」がこれから展開することを予知するのに十分な風景を，カイザーリングの眼前に示したのである。

中国との関係というパースペクティブから，カイザーリングは「一般に思われている」日本人についてのステレオタイプな評価，つまり「日本人はいわゆる創造者のタイプではなく」「単なる模倣者」であるという評価を問題にしていく。ここでも「創造」と「模倣」という二律背反的な概念を用いながら，そのいずれでもない地平に属する日本人の「才能」を説明している—

「日本人はいわゆる創造者のタイプではない。しかし一般的に思われているような単なる模倣者とも言えないのである。日本人の本質は万物を利用し尽くす点にあるのである。ここで利用するという言葉は，柔術家の意味において理解されねばならない。柔術は日本精神のシンボルである。柔術の大家となるには何が必要なのであろうか？　何かを創造する才能ではなく，秀でた観察力が必要である。そしてさらに，何かを見て単に印象に止まるのではなく，その背後にある実践的意義を瞬間的に捕らえるセンスが重要であり，またそれを最大限具体的に利用できるようにする能力が必要である。頭脳と手の共同作業，しかも極めて高いレベルでの共同作業が大切であり，こうした作業の現場では，すべての頭

の世界となったのです。こうした崇高な世界に私は完全に身を委ね，もはや意志なども持たず，偏見や憶測から解放され，感覚と官能だけの人間となりました。そのとき，死者達の世界がまるで手で摑めるかのように私の前に立ち現れてきたのです。」(Hermann Keyserling: Philosophie als Kunst. Darmstadt 1922, S. 45.)

脳による認識が瞬間的に，最も目的に適した身体の運動と一体となり，記憶された経験が身体の動きとなって現象しなければならない。」[20]

カイザーリングは，日本文化の「特殊性」を「柔術家の意味」における「万物を利用し尽くす」才能に見ている。つまり「柔術家が相手の体勢を見て，戦いに有利な点を見つけ」[21]攻撃に移るように，日本人は「観察」をして「背後にある実践的意義を瞬間的」に捕らえ，「自分の体勢」を決めて「最大限具体的に利用できる形態」を生み出すのである。日本人は「コピー」することに才能があるのではなく，カイザーリングによれば「現象を見て，その特殊なところを（本質ではない！）内面で理解し，自分自身と有機的に関連付け，利用し得る限り利用し尽くす才能に恵まれている」のである—

「日本人は昔，こうして中国の様々な文化形態を取りこみ，利用してきた。日本人はおそらく中国文化の本質を本格的に理解したのではなく，しかし単にいわゆる猿真似のように表面を模倣したわけでもない。中国文化の現象の中に身を完全に浸して，中国的な態勢を取りながら生活を営んできたのである。日本人は中国の精神に取りこまれることは一度としてなかった。日本人は身体で言えば‘器の機能’を中国にたいして担ったのである。それゆえ，日本人は中国の精神に内面でまったく触れないままでいられたのである。日本人は身を差し出す位に中国の影響を受けながらも，内面はほとんど変わることがなかった。この点は，日本人の特筆すべき資質である。地球上のすべての人々から，異質なるもの

20） Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 671f.

21） ここでカイザーリングが柔術を話題にしているのは単なる思い付きではなく，世紀転換期に日本の柔術がヨーロッパ，特にベルリンで紹介され，注目を集めた点にも関係していると言えるであろう。1900年に数人の日本人がロンドンとベルリンで自己防衛の手段としての柔術を紹介し，ベルリンでは„Katsukuma Higashi“という人物が当時人気を博していたサーカス劇場「シューマン」に登場したことが伝えられている。

を害を恐れることなく自分のものとする点では，日本人はそうしたことを実行するのに適した民に違いない。なぜなら，日本人の内奥の最も深いところは，外部から触れることはできないからである。」[22)]

創造とは通常は無から何かを生む行為であるが，日本人の「創造性」は，「模倣」という回路を介しながらも「単にいわゆる猿真似のように表面を模倣」する域に留まるのではなく，「思考」と「実践」の「極めて高いレベルでの共同作業」を経て独自のものを生んで行くプロセスに求められねばならない。カイザーリングによれば，日本人においては「頭脳による認識」はすべて「瞬間的に，最も目的に適した身体の運動と一体となり」，「記憶された経験が身体の動きとなって現象」するのである。外部から入ってくるものは，こうした「思考」と「実践」の有機的な運動体のなかに組み込まれ，「日本人の内奥の最も深いところは」外部からまったく干渉されることなく持続していく。日本人の「創造性」についてのカイザーリングの分析の正否については議論の残るところであるが，いずれにしても日本人の才能のなかに「独自なもの」を見出し，単なる模倣論から脱している点は評価できるのではないだろうか。

3. ノスタルジアの旅 — 失われたバルトへの郷愁

カイザーリングの日本記述の特徴の一つとして，「人里離れた奥地に生きる人々」の生活のなかに「失われたバルトへの郷愁」を感じている個所が比較的多く見られる点を挙げることができる。本論の初めで触れたように，カイザーリングは「1880年頃に生まれた世代」，つまり「人生の壮年期に，ロシア革命を体験し，故国の昔ながらの秩序が崩壊する様を目の当たりにした」世代に属している。この世代のバルト人のなかには，「世界の様々な地域をさすらう放浪者となった」人々が少なからず存在し，そうした「さすら

22) Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 672.

い人」は「根無し草・故郷喪失の気持ち」を抱き続けていた。カイザーリングの記述には，こうした滅び行くバルト貴族の残照が認められる—

「人里離れた所に残る日本独自の雰囲気はこれまでに体験したいかなるものよりも私の心に馴染むものがある。小泉八雲を読んだ時に，私はこうした田舎の人々を好ましく思ったが，それは八雲によってこうした人々の柔らかさや甘美さ，人を捉えて離さない繊細で心和ませる魅力などが描かれているためであった。そうしたすべてのものが実際に日本の辺鄙の地に生きているのである。里に住むごく普通の人々は愛すべき連中である。こうした田舎人の示す律儀な態度は疑いもなく心の底から生み出されている。利得を得ようとか，人を騙してまでも得をしようとかいう気持の痕跡はなにも認められなかった。私にたいしてはおそらく最大の敬意が払われたと思われるが，それは京都の若き詩人である案内人の指示に従って，私が里の人々に封建君主のような態度を示したからである。つまり自分の生まれたバルト地方で，家長を中心にものを考える習性の農民層にたいして君主が振る舞うような立場で私は日本の里人に接したのである。大和の人里離れた谷間では中世はまだ終わっていない。そこでは明治の時代は始まっていないのだ。農民たちは主人にいまなお自分たちよりはるかに優っている上流の雰囲気を求めており，そうした距離感とともに慈悲深い寛大さを期待しているのである。絶対の優位の意識は，まさに逆に極めて強い大家族意識を生み出してもいる。大和の農民たちは今も上を崇め見る術を心得ている。ヨーロッパ社会ではこうした主人の役割を演ずる機会は減少の一途を辿っているが，ここ大和で私はこうした主人のような気持を心ゆくまで満喫できるのである。実際のところ，報酬を求めないでいろいろと仕えてくれて好意を示してくれる人々にこと欠くことは一度もなく，これは主人たる気持の味わいをを越えて，実際上の利得であった。」[23)]

23) Hermann Keyserling: a. a. O., Zweiter Band, S. 581f.

カイザーリングに「大和の人里離れた谷間」を案内した「京都の若き詩人」が具体的に誰であったのかはもちろん不明であるが，「詩人」をこの文脈で登場させていることには意味が込められているように思える。なぜなら，カイザーリングは「本質」に「最も優れた表現」を与えることができるのは，「精神のみで生きている人ではなく，精神を物質化する術を最もよく心得ている人である」と述べ，「精神界の真実をもっとも完全な形で把握した形象」は「聖人や哲学者」からではなく，まさに「詩人」から生まれてくるとの認識を示しているからである。この「京都の若き詩人」とともに，「中世」が今尚残り，「明治の時代」つまり近代の始まっていない「空間」を訪れるのである。この「空間」には，「ヨーロッパ社会」では失われつつある，「絶対の優位の意識」と「極めて強い大家族意識」が時間を超えて生きているのである。カイザーリングの先祖たちがバルト貴族として，臣下や農民たちとともにそれぞれの役割を分担しながら作り成してきた舞台のような演劇的空間が，「大和の人里離れた谷間」において依然として幕を閉じていない様相が体験されている。このような「空間」が「大和」のどこに実在したのかを具体的に問うのは，ほとんど意味のないことであろう。その「空間」は「大和」であればどこでもいいわけであり，そこに住む「大和の農民」と「主人」の共演によって醸し出される雰囲気は，カイザーリングを失われたバルト世界への限りないノスタルジーへと駆り立てているのである。

カイザーリングの旅日記は，バルトばかりでなくヨーロッパにももはや求められない「自分の本質存在」を再確認し，それを「深化」し「高度なもの」に高め，具体的な現実を超えるようなメタな実在へと連なる道筋を極めようとする強靱な意志によって執筆されている。従って，現象の客観的記述がどこまで実証に耐えられるのかは疑問とせざるを得ない個所が見られ，実際「自己中心的」な記述となっているという批判も見られるのである。[24] し

24）「自己中心的」な記述という批判については以下の記述を参照のこと―「カ

かし，世紀末ヨーロッパの精神的風景が，日本の現象の記述と微妙な関わりのなかで垣間見られるカイザーリングの記述は，今尚その魅力を留めているとは言えないであろうか。

イザーリングが記述の形式として日記形態を選択していることは，ヨーロッパ世界におけるカイザーリングの内なる孤独と関連付けてよいのではなかろうか。日記形態をとることによって，印象や考察，それに事実に基づく情報を混ぜ合わせて提供し，記述の順番も自由にアレンジできる可能性をさらにカイザーリングは手にしたのである。カイザーリングの日記には，正確な場所や日時の記載はなく，それは自分の自己実現の経過とさまざまな段階を記録に残す一種の記憶装置のようなものと言えるであろう。この『或る哲学者の旅日記』は自我と世界との出会いを表現したものである。多くの観察は主にカイザーリングの自我との関わりにおいて記述されている。それは柔和ではあるが「自己中心的」な性格を帯びている。なぜなら詩的哲学者であるカイザーリングにとって，世界の客観的記述は問題ではなく，世界との関係のなかで自我を顕にすることこそが目的であった」。(Vridagiri Ganeshan: a. a. O., S. 245.)